

所謂西南蠻夷と支那との早くより交通せるは、今更ためて説くの要を見ず、而して隋唐の頃七世紀の終迄に於る南方の航海事業は、殆んど波斯人の獨占とも稱するを得べく、法顯伝、南海寄歸伝、大唐西域求法高僧傳、鑑真和尚東征傳等を見れば能く其有様を知るを得べし、八世紀以降に至りては、波斯の滅亡と共にアラビア人の東航期に移れりと雖、尙ほ波斯船の多かりしことは、アブルフェダ等の語る所にして、有名なる事實なりとす、されば宋代に至りては特に波斯の名を示さずと雖、宋史大食伝には新興の大食を以て、もと波斯の一部と記して舊來の波斯は此中に含まれたり、而して此等南人の來航して盛に市易せし有様は、唐末黃巢の亂時一度衰退せしと雖、宋に入りて太祖の開寶四年、廣州の市舶司を置きて以來、(宋史食貨志、文献通考)咸平二年には杭州、明州に市舶廳を置き、天聖元年には之を司と改め、(宋史食貨志)終に元祐(哲宗)の始には、此文書の書かれたる泉州(イブン、バッタ、アブルフェダ、マルコポロ、オドリク等の Zayton 或は Zaytun として伝ふる所なること、クラプロートの説けるが如し)及び密州(膠州)にも之を置けり、而して崇寧(徽宗)の間には、他の市舶司は廢せられしも、獨り泉、廣の一州のみは、尙ほ之が中心として存在せり、南宋に至りても、尙ほ財源を得んが爲に、之が開市を繼續したりしが、文献通考の記する所に従へば、宋朝の政策専ら利を獲んとするにありしより、嘉定の頃に至りては、年々至る所僅かに四五艘に止まれりと、然も此等の間に波斯人の伍せしことは、アブルフェダ等の記する所に従ふも固より疑ふ可きにあらず、慶政の逢ひし南蠻人なるものは、此等波斯人中の「兩三人」なりしならむ。

文書下方の左端に、「南番三寶名 ハスツタラ(?) ホタラム ピク」と記せり、之れ所謂南番にて三寶即ち佛、法、僧、を稱する語の伝へられたるものなるべし、然も何れの國語なるやを知らず、識者の教を乞はんとす、